

会 告

昭和五十四年度史学研究会大会および総会は、予定通り十一月二日（金）午後一時より京大会館において開催されました。公開講演は永井三明、樋口隆康両氏により、次の演題で行われ、盛會裡に終りました。

ヴェネツィア貴族階級成立の背景

永井三明氏

アフガニスタンにおける京大隊の調査

樋口隆康氏

なお、大会と総会に先立って開催された秋季定例の理事・評議員会において次の各氏の役員の退任ならびに新任が承認されました。

退任

理事、會田雄次。評議員、富本健輔。監事、川勝義雄（理事に復帰）。

新任

評議員、川口博。監査、中村賢二郎。

以上
史学研究会

昭和五十四年度

史学研究会大会講演要旨

「ヴェネツィア貴族階級成立の背景」

永井三明

一般にヴェネツィアにおける貴族階級の成立は、一二九七年のセラータと呼ばれる大議會メンバーを特定の家柄に限定した行為によって確定されたとされる。ところが仔細に検討すると、むしろセラータは中産階級に貴族への門戸を開いた行為であった。こうして十四世紀のヴェネツィア貴族は、中産階級を吸収しようとする柔軟性を具えていた。ところが、一四〇三年に、こんご一切中産階級を貴族に加えないことを決定して、明確に貴族階級の範囲を定め、それいご約二四〇年にわたって貴族階級は独占性、排他性を行使し、ヴェネツィア共和国衰退の原因をつくり上げる。

本講演では、約一世紀をかけて貴族階級の性格がつくられていった背後にある、ヴェネツィア社会における意識の変化を見よ

うとした。十四世紀は不振にいたる下降の時代である。その理由は、蒙古帝国の瓦解によりヴェネツィアはアジアとの接触を断たれて冒險的通商が不可能になったこと、さらには、一三四八年の黒死病によるヨーロッパ市場が収縮したことによる。このことは商業における利益率の低下、行動範囲の縮小、イスラムの妨害による危険性の増大となり、安全な政府債券への投資や、危険分散のための保険の登場を見る。これともなつて、ヴェネツィア人の意識は、華かな充足感から莫然たる不満や不安感へと移り、運命は悪い方へと傾くと考えられ、要心深さ、危険回避が一般的意識となる。

しかも、この時代には、人間の尊嚴の表現よりも、神への服従、聖人への依存の感情が表面に出てきたことは、当時の芸術作品の中にみとめられる。また年代記も、あの時代になるにつれて奇蹟が正面に出てくるのである。

こうして人間の無力を意識した人が、設定された限界の中で自己を主張するとき、

競争の激化と弱者の排除は必然であった。このことが、中産階級の排除をともなう独自の貴族階級の成立の核心をなすものである。

アフガニスタンにおける

京大隊の調査

樋口隆康

京都大学中央アジア学術調査隊は、京都大学イラン・アフガニスタン・ペキスタン学術調査隊を一九七〇年に改組したもので、文部省の海外調査に対する研究助成をうけて、一年おきに現地調査を実施している。その主要目的は、中央アジアの東西交渉史上重要な役割を果たしたクシヤーン民族の文化を、考古学的に解明しようとするものである。

現在は、アフガニスタンを主要なフィールドとしており、そこで次のような調査を実施中である。

1、タバ・スカンダルの発掘

カールルの北三〇キロ、カピシ盆地の南端に位置する大型のテペである。不等辺六角形の長軸四四〇メートル、短軸二八〇メートルを計り、高さ四〇メートルある。

五シーズンの発掘で、五分の一を終わったにすぎないが、次のような事実が明らかにになった。テペの上面は、周壁にかこまれており、内部は東半部の高地と西半部の低地にわかれる。東の高地は不正方形の石積基壇のある内城があり、その西面には半円形の稜堡四基がついている。この基壇の上には、レンガ積の部屋が周縁に並んでおり、中心は広場だったらしい。

この内城の東・西両側には、神殿址その他の建物があり、その一つから、大理石製のウス・マヘシュヴァラの彫像が出土した。西区の低地では居住区らしく、スキンチアーチをもつドーム天井の部屋、ヴォールト天井の長方室などがある。北西隅では門の一割や周壁内の壁道などが検出された。出土品、とくに石彫から、ここは七世紀ごろのヒンドウ神殿をもった城塞の町であったことが判る。

『大唐西域記』の迦畢試国の条にある「霏蔽多伐剌祠城」に比定される。

2、バーミヤーン石窟の調査

ヒンドウクシュ山中にあるバーミヤーン石窟寺院はこれまでも色々調査されているが、その全貌は明らかにされていない。われわれは、ステレオカメラによる全体の写真測量を行ない、全石窟に番号をうち、各石窟の写真撮影と測図を製作した。その結果、バーミヤーン石窟は一三〇〇メートルの崖面に、七五〇窟の存在が確認された。今后、石窟構造や壁画の表情を調査するつもりである。